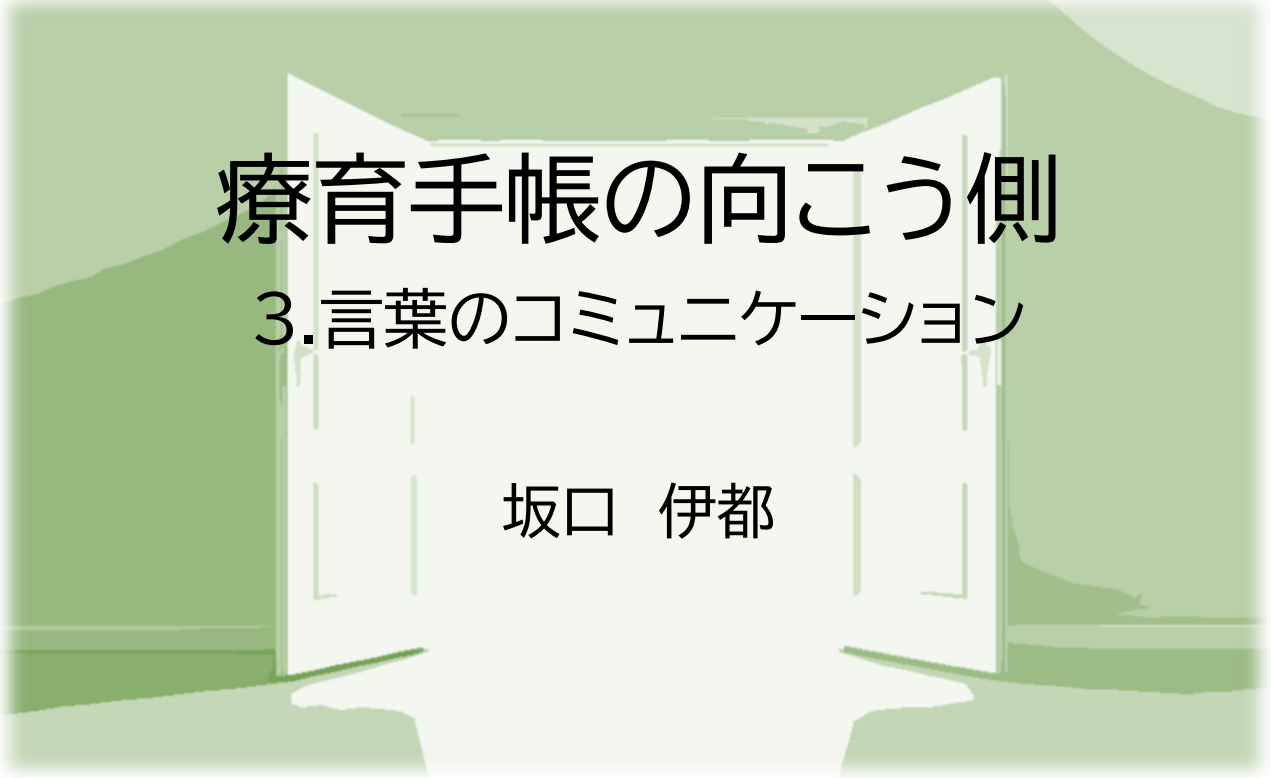




療育手帳の向こう側

3.言葉のコミュニケーション

坂口 伊都

はじめに

子どもが誕生した時は、健やかに育ってくればそれでいいと思っていても子どもの首がすわり、表情がでてくるようになると、早く歩いて、早く喋ってと子どもが少しでも早く成長することを願い、子どもとコミュニケーションができる日を心待ちにしていました。

言葉はまず、あーあー等の言葉にならない喃語から始まり、だんだんと意味のある言葉に移行していきます。2歳頃になると、爆発的に言葉を覚えていくといわれ、大人顔負けのことを言い出します。

「もう、しょうがないわねえ」

「こちらにどーじょ」

「そんなことしたらダメでしょ」

と大人の真似をして、周りを笑わせることもあります。そして、子どもがある程度の言葉を使うようになると会話の形になり、コミュニケーションが取りやすくなったと感じます。

一方、子どもから言葉がなかなか出てこないこともあります。子どもの発達が気になりだすきっかけを尋ねると、「周りの子が話し始めているのにうちの子は言葉がなかなか出てこない」という答えをよく聞きます。時には、それまで話していたのに急に喋らなくなり、言葉が消えたようになる折れ線型と呼ばれる症状になる子どもも存在します。



子どもの発達が気になった際、療育を勧められ通い始める方が多いです。その他、基本的な身体の使い方を伸ばす理学療法、遊びを取り入れながら手先の運動感覚のサポートを促す作業療法、言葉の理解を深めコミュニケーションを高める言語療法等を受けることもあります。療法の効果だけでなく、少人数の子ども集団の中で、子どものペースに合わせてくれる大人と過ごす時間は、子どもの社会性を育みます。

子ども集団全体に言葉で指示が出され、すぐ理解することが難しく、指示に従えない子どももいます。すると、皆の前で先生から注意を受け、それが続くと子どもが自信を失くし消極的になり、周りの子どもと関わることを避けることがあります。

療育等の支援サービスでは、子どものペースに合わせ、言葉を短く提示や絵や写真を見せる等、子どもが理解しやすくなる

工夫をします。子どもに指示が通じると次の行動に移すことができ、「わかった、できた」と思えるようになります。この積み重ねが自信を回復し、社会に対して抱く不安や恐怖感を減らし、チャレンジしてみようとする意欲になります。

コミュニケーションを取る時私たちは、言葉で理解しようとするので、言葉が伝わらないことはストレスになります。外国に行って、言葉が伝わらないと、もどかしさだけではなく知らない土地で言葉が通じないことへの不安に陥る感覚を想像してみてください。

ですが、コミュニケーションは言葉よりも視線や表情、姿勢といった部分を無意識にキャッチしています。笑っているけど、目が笑っていないくて相手が本当は怒っているとわかり、冷や汗をかいたことはありませんか。実はこの非言語コミュニケーションの方が言葉よりも、相手の感情を察する材料にしているといわれています。文章で伝えるよりも電話で話す方が、それよりも顔を見て話す方がもっと伝わりやすいと誰もが経験していますが、言葉に頼ろうとしてしまうのが人というものです。

自分や相手の思いを知りたい時、

「ちゃんと言葉にしてよ」

「言わないのは卑怯だ」

「言葉にしてくれないとわかりようがない」

と訴えたことはありませんか。それを子どもにも言いたくなりますが、子どもが言葉を話せるようになっていても吸収している過程にいて、言葉の意味まで届いていないことがあります。子どもはどのように言葉を認識しているのでしょうか。今回は、子どもと言葉について考えていこうと思います。

子どもが使う言葉

保育士養成の実習担当をしていると、保育所に実習指導に赴くことがあります。訪問すると、人懐っこい子が寄ってきて、

「ねえねえ、だあれ？」と声をかけてきます。

「◇◇(実習生)先生の先生なの」と答えますが、私の返答は興味がないようで、

「ふーん。あのね、〇〇ちゃんが△△ちゃんにね、◎×\$＃&・・・」

と弾丸トークに突入します。いつも話をしている子ではないので、後半は何を言っているのかさっぱりわかりません。

「へえ、そうなの。それはすごいねえ」

と適当に話を合わせると、その子は大きく頷いて満足します。話し始めの頃は、聞いてもらえることに意義がある頃なので、この方法で十中八九機嫌よくしてくれます。

子どもかわいいなあとホクホクした気持ちで実習生の話を聞き始めると、実習生が渋い顔をして子どもへの指導が上手くいかないと暗くなっていることがあります。何事かと思い、困っていることを尋ねると、

- ① ふざけて言う事を全く聞かない
- ② 絵本を読んでと言うので読んでいるのに途中でどこかへ行ってしまう
- ③ 大人を馬鹿にしたことを平気で言う

と真剣に訴えてきます。

「それが子どもというものでしょう」

と言いたくなるのを抑えて、実習生の話を聞いていくと、子どもを大人と同等に見ているとわかりました。子どもの言葉や態度をそのままの意味で受け取り、プライドが傷つけられていました。子どもは、周りのマネをする名人で意味もわからず使っている可能性があります。それを考える余裕が実習生にはなくなっていました。

子どもは言って欲しくない言葉ほどよく口にします。

「ばーか、ばーか、おならプー」

「もう、そんな言葉ばかり使って、やめなさい!!」

子どもを叱っているのに嬉しそうに笑われて、怒っている自分が馬鹿らしくなる何てことはありませんか。子どもは相手してもらっていることが嬉しくて、叱られていると伝わっていないのです。大人に反応してもらえることが嬉しいと、して欲しくない子どもの行動を強化する結果になります。して欲しくな

い時は、反応せずに取り合わないでいる方が止まります。

言葉がなかなか出てこない子に言葉が出てくるようになると、子どもとのやり取りが以前よりもしやすくなったと喜ぶ声も聞きますが、すぐにスムーズなコミュニケーションになるわけではありません。子どもは、言葉を吸収するだけでもかなりの力を使っているのではないかと思います。どうやって言葉を覚えていったか、自分では覚えていませんが言葉を吟味できるようになったのは、社会の中の一員として扱われるようになってからです。

言葉ではないもの

小学校に入学し、初めて机と椅子に座ることに慣れず、緊張して先生の話に集中できなかったことを思い出します。先生の話が入ってこず、周りが動き出しても何をすればいいのかわからないので周りの真似をしてやり過ごしました。次の行動が見えない時は、自分だけがわかっていないのではないかと凹み、その状況がとても怖かったです。

冷静に考えれば、大人でも上の空で話を聞いていたら周りが盛り上がっているので、何で笑っているかわからないけど、とりあえず笑って済ませることがありますが、子ども時代の置いてきぼり状態は、深刻に捉えてしまいがちです。



小学生になると、言葉の意味あいもわかるようになり、言うてはいけないことの分別もついてきますが、子どもがいつも倫理的に行動できるわけではありません。そして、言葉の理解が周りの子どもに比べてゆっくりな子もいます。

集団で生活している中で、わからないと知られれば、周りから馬鹿にされ、大きなストレスになります。わからないと言わなければ、わかっている前提で話が進み、言われてもしないから怠けているや反抗的だと評価されます。子どもは意見する言葉を持たず、どう反応しても批判され、不条理としか言いようがありませんが、大人には子どもがわざとしているように映ります。

両親と子どもが話をしていた場面で、不思議なことがありました。

父親は、にこにこ笑顔で大きな声で子どもに話しかけていますが、

「〇〇は、言われたことできないもんな。わざとしないもんな。」

と批判しているのですが、子どもは嬉しそうに笑い、うんうんと頷いていました。

母親は、子どもが言うことを聞かないことに疲れているようで、眉間にしわを寄せながら話します。

「この子にもやさしいところもあるんですよ。荷物持ってくれたりね、そういうこともしてくれます。」
褒められているのに、子どもは俯いて、うなだれ、身体を丸めていました。

父は批判し、母は褒めているのに子どものリアクションが真逆です。

話の内容はわかっていなくて、にこにこ笑顔を向けられていると受け入れられていると嬉しくなり、渋い顔をされていると非難されていると感じていました。母親の愛情深い言葉は、残念ながら伝わらず、父親のわかりやすさに安心感を覚えていました。

この子は、短い会話なら理解できますが、会話が長くなると何を言われているのかわからなくなっていました。父親がいると言うことをきくが、母だけだときかない。母は子どもから受け入れられていないと思っていて、悲しそうな表情を見せました。子どもには、その顔も自分が否定されていると受け止め、にこにこ笑ってくれない母に構えてしまうようでした。

親子そろってこれ以上傷つきたくないと思って、素直に表現できなくなっています。仲良くやりたいとお互いに願っていても、歯車が上手く回らないことも起こるのだと知りました。

保育士の先生は、子どもに対して大きな声で、短い言葉ではっきり言い、オーバーリアクションで伝えます。それは、子どもに伝えようと試行錯誤していった結果なのでしょう。

先程の子も、わざと言う事をきかないわけではなく、どうしたらいいかわらずに困っていますが、それを上手く表現できずにいて、親から誤解を受けていました。

言葉で伝えることも大切ですが、まずは子どもに「あなたのことが大好きですよ」と伝えて、言葉を受け入れる土台を作っていくことが大切なのだと感じます。

赤ちゃんの頃は、ご飯を食べても「いっぱい食べて偉いね」「美味しいね」と言ってもらえますが、大きくなると「早く食べなさい」「ちゃんと食べないとダメでしょう」と躰が先にきます。存在そのものを認められていたのに、気づいたら怒られてばかりになっています。子どもにとって親は良くも悪くも特別な存在です。できることなら、好かれないと思っていることは信じてあげても大丈夫です。子どもに言葉の意味が伝わっていないとしたらと考えてみませんか。

